ウィリアム・Z・フォスターの最近の業績

——『アメリカ史上の黒人人民』を中心に——

本　田　創　造

1

あまねく知られているとおり，ウィリアム・Z・フォスターは，こんにちのアメリカが代表する，もっともすぐれたマルクス・レーニン主義の指導者，理論家のひとりである。同時に，かれは，いわゆる職業的な歴史家ではないが，文字どおりげんみつな意味での，世界でも數少ない歴史家のひとりである。

フォスターの歴史的著作は，過去においても，かなりの數にのぼるが，とくに最近になって——朝鮮の内戰このかた——かれが，あいついで世に問うたアメリカ史に關する3册の大著は，注目に値する。すなわち，

『アメリカ政治史概説』*Outline Political History of the Americas*, 1951 年發行。

『アメリカ合衆國共産黨史』*History of the Communist Party of the United Sates*, 1952 年發行。

『アメリカ史上の黒人人民』*The Negro People in American History*, 1954 年發行。

がこれである。

なお，フオスターは，老齡にもかかわらず，今年2月の 74 回目の誕生日を記念して，さらにもうひとつの勞作を發表するそうである。第1，第2，第3のインターナショナルをつうじてのげんざいまでの歴史（1864 年～1954 年）で，『3つのインターナショナルの歴史』*History of the Three Internationals* と題されている[1]。

これらの書物は，いずれも，International Publishers の出版にかかわるものである。最初にあげた書物は，原書を入手してまもなく，わたくしも本誌の書評で簡單な紹介をこころみたことがあり[2]，それに最近，山邊健太郎氏の念入りな飜譯が，上下2分册で，大月書店から出版された[3]。念入りなというのは，譯の正確さばかりでなく，アメリカ史にそれほどなじんでいない讀者のために，必要事項を説明した非常に澤山の譯者注が挿入されており，あわせて近代の年代には日本の年號とその時代のおもなできごとが付記されているからである。

また，二番目の書物は，やはり，おなじ書店から，菊池謙一・鈴木正四氏が代表する合衆國共産黨史刊行委員會の飜譯として，これよりまえに，上下2分册で出版されている[4]。これらの日本譯が，資本主義世界で最初の飜譯となったことは，意義ぶかい。それは，書物の内容と密接に結びついている。

最後の書物は，まだ，日本譯はない。それで，さきの2つの書物は，なるべく日本譯をよんでいただくことにして，本稿では，主としてこの最後の書物の紹介を中心に，必要に應じてさきの2つの書物にもふれながら，これらフォスターの最近の業績の歴史的意義を，げんざいの日本で，アメリカ史を勉强しているもののひとりとして，わたくしなりに考えてみたい。（以下，本稿では，『アメリカ政治史概説』は『政治史』，『アメリカ合衆國共産黨史』は『黨史』，『アメリカ史上の黒人人民』は『黒人史』と便宜的によぶことにする。）

2

わが國の書物でいうA5版大，上質とはいえないが，濃紺の堅いカバーに，608 頁の頁數をもった『黒人史』は，そのかたち，大きさ，あつさとも，『政治史』『黨史』どほとんどおなじである。（ついでながら，『政治史』は 668 頁，『黨史』は 600 頁。）

『アメリカ史上の黒人人民』というその表題にみられるとおり，植民當時からげんざいまでの，過去4世紀にわたるアメリカ史のそれぞれの時期——社會的發展のなかで，黒人人民が，どのようにして歴史の進步に貢獻してきたか？　かれらが果してきた役割は，どんなふうに意義づけられねばならないか，また，その歴史的評價は？　黒人人民が，みずから進んで，たえず，進步の側にたって，たたかってきた——とくに 1776 年の獨立革命や 1861～5 年の南北戰爭，それにつづくリコンストラクション，さらに今世紀にはいっては 29 年にはじまる

1）*Political Affairs*, January, 1955. pp. 44—51 にその内容目次が，また同誌の5月號には Aptheker の紹介が掲載されている。

2）『經濟研究』第3卷第4號。

3）上卷は 1954 年 10 月，下卷は 1955 年1月，上下卷で 980 頁。

4）上卷は 1954 年3月，下卷は 1954 年8月，上下卷で 815 頁．索引が 32 頁。

あの大恐慌やふたつの世界戰爭，等々といった危機の時代に——という事實は，いかなる理由にもとずくのか，かれらの側のその主體的條件はなにか？　そのようなたたかいをするにあたって，黑人は不可避的にどのような困難に直面しなければならなかったか，黑人を動產とする奴隷制度——Chattel Slavery や黑人差別制度——Jim Crow, そして白人的排外主義——White Chauvinism とは，いったい，どんなものか？……そういったことがらを，ひとつひとつ，具體的な史實をてがかりにして，著者は，科學的に分析しながら，一貫した黑人人民の歷史的成長過程——もっとはっきりいえば，民族形成過程——を，みごとに總括的に展開してくれている。そして，そこから，直接的にはこの國の黑人人民の，すすんではアメリカ人民の，げんざいならびに將來においてとるべき道を，げんじつの實踐的課題として示唆している。この實踐的課題の核心は，また，こんにちのアメリカ合衆國における黑人問題とはなにか，それは，だれが，どんなふうにして解決しなければならないのか，という問題の提起であり，解答である。

ここで，著者が一貫して依據している理論的基礎は，いうまでもなく，一般的には，マルクス・レーニン主義であり，とりわけ，レーニンによって發展させられ，スターリンによって確定された，植民地・民族問題に關する理論にみちびかれながら，アメリカの黑人人民を，民族——しかも抑壓された民族と規定し，その觀點から，すでに述べたように，この國の黑人人民がたえしのんできた，自由のための，長期にわたるたたかいの歷史を，そこでかれらがみずから一民族を形成してきた過程としてとらえた。「アメリカ黑人の歷史は，一民族の成長と發展の歷史である。黑人人民の基本的な民族的諸傾向は，かれらの數世紀にわたる抑壓とのたたかいの，あらゆる局面にうかがわれる。——」(pp. 466～467)。

じじつ，それらの諸傾向は，段階的な差異こそあれ，植民時代以降の數々の奴隷暴動——たとえば，1739年南カロライナのストーノの，1800年ヴァージニアのガブリエルの，1811年ルイジアナのチャールスの，1822年南カロライナのデンマーク・ヴェセイの，1831年ヴァージニアのナト・ターナーの大暴動をふくむところの——反亂のなかに，また南北戰爭以前の黑人集會運動 Negro Convention Movement やアメリカ奴隷制反對協會 American Anti-Slavery Society の活動をふくむところの，奴隷制の即時無條件廢止を要求するアボリショニスト運動 Abolitionist Movement のなかに，さらにあの南北戰爭，再建期に結集された黑人人民の革命的な運動のなかに，そして1877年のヘイズ＝ティルデンの妥協 Hayes-Tilden Compromise による黑人にたいする裏切りののち，新らたに再編成された獨占資本家・プランター權力のもとでは，1880年代の人民黨運動 Populist Movement に呼應する諸活動のなかに，また黑人の移住運動 Negro Immigrant のなかに，世紀のかわりめごろからは，帝國主義支配のもとで，新らたに展開された，ブッカーT・ワシントンのタスキーギ運動 Tuskegee Movement やW・E・B・デュ・ボイスのナイアガラ運動 Niagara Movement, とりわけ，本質的には黑人のブルジョア民族主義ではあったが，黑人のあいだに民族意識をかきたてるうえで大きな役割を果したマーカス・M・ガーヴェイに指導されたガーヴェイ運動 Garvey Movement をふくむところの近代黑人解放運動のなかに，また，A・F・L・をはじめとする勞働組合の白人的排外主義に反對する勞働組合運動內でのたたかいのなかに，そして，新らしいファシズムといわれるこんにちのマッカーシズムに反對し平和をもとめるたたかいのなかに，はっきりと示されているのである。そこにみられる黑人人民の强力なエネルギーは，かれらが「民族のなかの民族 a nation within a nation への歷史的成長」(p. 14) をとげてきたその具體的なあらわれであり，この民族的成長は，かれら黑人人民の長い苦しいたたかいのなかでこそ，はじめて可能になったのだということは，とくに强調されねばならぬ。

これは，こんにちのアメリカのマルクス主義者が，黑人人民の問題をとりあつかうばあいにとっている基本的觀點であり，その問題にたいする歷史的認識の基礎である。そのような立場は，當然のことながら，げんざいのアメリカ共產黨のプログラムのながでも，第一級の重要さをもっている，黨の黑人問題にたいする立場とも一致する。わたくしは，べつの機會に，民族問題としてのこんにちのアメリカ黑人問題を，黨の黑人政策との關連において，まとめてみたいとおもっているので，紙數の關係もあり，ここで詳しくのべることはしないが，げんざい，アメリカ共產黨は，この問題に關して，つぎの諸點を，確認している。すなわち，

1)　黑人問題や黑人解放運動の心臟部がアメリカ南部にあること。

2)　そこには，前世紀の 30 年代，棉花生產の昂揚期にはっきりとかたちづくられたいわゆる黑人地帶 Black Belt——住民の過半數が黑人である——が，げんざいにおいても堅固に存在しつづけていること。

3)　その黑人地帶を維持させている經濟的基礎がプランテイション制度 Plantation System であり，この制度はかつての黑人を動產とする奴隷制度の延長であると

ころの半ば封建的な借金奴隷制度 Debt Slavery であること。

4) この制度のうえに北部の全融資本家と南部の大土地所有者との結びつきがなされており，南部の政治權力の基礎がまたそこにあること。

5) 黒人人民は内部的に階級分化をとげながら——黒人プロレタリアートの比重が増大している——みずから一民族をかたちづくっており，この民族としての立場から，あらゆる種類の差別待遇をうけていること。

6) だから，合衆國の黒人問題は，この國の過去の社會主義者がそれを迫害された少數人種の問題と考えたり，また根本的にはたんなる勞働者や勞働組合の問題とみなしたりしたのとは，はっきりと異っていること。

7) すなわち，黒人地帶における黒人人民は民族自決權 self-determination をもつところの被抑壓民族であり，北部の黒人は被抑壓少數民族であること。

8) したがって，黒人人民の獨占資本家・プランター權力にたいするたたかいは，本質的に，民族解放のたたかいであること。

9) それゆえに，この問題の解決にあたっては，軍隊をふくむところのアメリカのあらゆる生活面での社會的・政治的・經濟的な完全な平等を即時無條件にかちとる日常的なたたかいをおしすすめるとともに，南部の土地革命と黒人地帶における民族自決權の承認を訴えねばならないこと。

10) そのためには，こんにちの情勢のもとでは，黒人はたんに白人貧農ばかりではなく，アメリカの白人・黒人の廣範圍の勞働者・農民・進步的知識人，すすんでは世界の民主的勢力と結びつかなければならないこと。

11) そして最後に，黒人問題の完全かつ究極的な解決は，他の民族問題とおなじく，社會主義のもとで，はじめて達成されるということ。

およそ以上のように，まとめることができるであろう。これらは，民族についてスターリンが規定した，あの科學的な定義——「民族とは，言語，地域，經濟生活，および文化の共通性のうちにあらわれる心理狀態，の共通性を基盤として生じたところの，歷史的に構成された，ひとびとの堅固な共同體である[5]」——を基礎とし，アメリカ黒人の歷史的な特殊性を十分に分析することによって，はじめてみちびきだされたものである。

このように，『黒人史』は，一言でいえば，マルクス・レーニン主義の立場からかかれた，最初の，體系的な，アメリカ黒人人民の歷史である。同時に，そのことは，マルクス・レーニン主義の立場にたって，はじめて，黒人の側からの，眞の黒人の歷史がかけるのだということの具體的な證左である。これは，この書物の第一の功績である。

第二に，『黒人史』は，かたちのうえでは，フォスター個人の著作になってはいるが，實質的には，數多くのその道の專門家たち——たとえば，カーター・G・ウッドソン Carter G. Woodson やW・E・B・デュ・ボイス W. E. B. Du Bois のような黒人歷史家，またハーバート・アプセカー Herbert Aptheker, ハリー・ヘイウッド Harry Haywood, フィリップ・S・フォーナー Philip S. Foner, ジェームス・S・アレン James Allen のようなマルクス主義者をはじめとする—— かがやかしい業績[6]の集大成である。そういう意味で，この書物は，ひとつの共同勞作であり，同時に，こんにちの黒人の民族形成過程のなかでの重要な一產物，一指標とみることができる。

第三に，この書物は，アメリカ史をとおしてみた「黒人（解放運動）史」であるとともに，同時に，この國の黒人人民をとおしてみた「アメリカ史」である。しかし，これは「新しい」アメリカ史，「もうひとつのアメリカ」——抑壓された人民大衆——の歷史である。D・A・ウィルカーソン Doxey A. Wilkerson は，『ポリティカ

5) スターリン『マルクス主義と民族問題』國民文庫版，50 頁。

6) 數多くのそれらの諸文獻のなかから，比較的よく知られており，かつ入手しやすいものを，すこしひろってみると，つぎのようなものがある。

Aptheker, Herbert, *A Documentary History of the Negro People in the United States*, N. Y., 1951, *To Be Free* N. Y., 1948, *The Negro in the Amerian Revolution*, N. Y., 1940, *The Negro in the Abolitionist Movement*, N. Y., 1941, *The Negro in the Civil War* N. Y., 1938, *American Negro Slave Revolts*, N. Y., 1943.

Foner, Philip S., *The Life and Writings of Frederick Douglass*, 4 vols.

Franklin, John Hope, *From Slavery to Freedom*, N. Y., 1947.

Woodson, Carter G., *The Negro in Our History*, Washington, 1947, *Negro Orators and Their Orations*, Washington, 1925.

Du Bois, W. E. B., *Black Reconstruction*, N. Y., 1935, *The Souls of Black Folk*, Chicago, 1903, *In Battle for Peace*, N. X., 1952

Allen, James S., *The Negro Question in the United States*, N. Y., 1936, *Reconstruction, the Battle for Democracy* N. Y., 1937.

Haywood, Harry, *Negro Liberation* N. Y., 1946

ル・アフェアーズ』誌の讀者案內のまえがきのなかで，『黑人史』が出版されたことの一般的意義について，つぎのようにのべた。「わが國の歷史的發展を理解することなく，こんにちの平和と民主主義と經濟保障のためのたたかいの，眞の意味をつかむことは，とうていできない。ところで，アメリカの經濟的・政治的・社會的生活をきずきあげるにさいして，黑人人民が過去においてはたし，また，げんざいはたしているところの偉大なる役割を無視して，合衆國の歷史的發展を理解する方法は他にないのである[7]。」また，この書物の著者のフォスターじしんは，その序文のなかで，げんざい，アメリカの黑人人民がはたしている歷史的役割に言及して，「かれらは，工業や農業またアメリカ勞働運動のなかで，なくてはならぬ重要な一要素となってしまった。いまでは，かれらは，わが國の一般的な政治生活における決定的な一勢力であり，大なる不正と抑壓にたいするかれらのたたかいは，抑壓された植民地人民の增大する世界的規模での民族解放斗爭のなかで，最重要問題になった——」といいきったが，その黑人ほど「もうひとつのアメリカ」をたんてきに代表しているものはなく，また，その黑人ほどゆがめられ，はずかしめられ，かくされた歷史をもったものはなかったのである。そういう意味で，『黑人史』は，新らしいアメリカ史，アメリカ人民の歷史である。このことは，つぎにのべるこの書物の具體的な內容のところで，もっとあきらかにされる。黑人問題のすぐれた理論家で，同時にこの問題の解決のために身を挺してたたかっているペッティス・ペリイ Pettis Perry が，「この書物は，アメリカ勞働者階級の手のなかで，偉大なる武器となるにちがいない。というのは，それは，黑人と勞働者との同盟の必要を具體的にさし示しているからである——」とのべたのも至當である。

3

內容に卽して，もうすこし，具體的に『黑人史』をみてみよう。はじめに，時代を追って，問題別に，書物の內容を，分類すれば，およそつぎのようなグループに整理するのが便利である[8]。

Ⅰ．合衆國の黑人問題の起り
Ⅱ．產業資本主義の擡頭と奴隸制廢止のたたかい
Ⅲ．內戰——南北戰爭
Ⅳ．リコンストラクション——戰後の民主主義的再建
Ⅴ．再建後の時代の黑人
Ⅵ．近代黑人解放運動の發展
Ⅶ．黑人人民と勞働運動
Ⅷ．黑人人民とマルクス主義運動
Ⅸ．民族としての黑人人民
Ⅹ．平和と民主主義のたたかいのなかでの黑人人民

また，書物の各章のみだしを示せば，つぎのとおりである。(書物は，ぜんたいが50章よりなっており，各章はさらにいくつかの節にわけられている。各節にもそれぞれのみだしがついているがこれは省略。)

1. アフリカ　2. 國際奴隸貿易　3. アメリカ植民地の奴隸制度　4. 1776 年の革命における黑人　5. 北部・北西部の奴隸制廢止　6. 國際奴隸貿易の禁止　7. 棉花生產と南北抗爭の不可避　8. 1820 年のミズーリの妥協　9. 初期の黑人解放運動　10. アメリカ奴隸制反對協會　11. 關稅・テキサス・メキシコ　12. 奴隸廢止運動の內部分裂　13. 1850 年の妥協　14. 19 世紀なかばのアメリカ奴隸制度　15. 奴隸暴動と逃亡奴隸　16. 流血のカンサスとジョン・ブラウン　17. 共和黨の形成　18. 奴隸制度反對のイデオロギー鬪爭　19. 1860 年の大統領選擧　20. 1861 年の革命的危機　21. 南北兩勢力の比較　22. 戰爭と革命　23. 奴隸の解放　24. 南部連邦の崩壞　25. 內戰における黑人人民　26. 戰後再建の諸問題　27. 議會對大統領　28. ジョンソン大統領の彈劾　29. 南部における革命　30. 反革命にたいするたたかい　31. 1877 年のヘイズの裏切り　32. 全國勞働同盟と黑人　33. 新らしい南部——隸從とテロリズム　34. 勞働騎士團とアメリカ勞働總同盟　35. 黑人と人民黨運動　36. 帝國主義と黑人選擧權の剝奪　37. 社會主義と黑人人民　38. タスキーギとナイアガラ　39. 全國黑人擁護協會の結成　40. 第一次世界大戰と黑人　41. ガーヴェイ運動　42. 共產黨と黑人問題　43. 被抑壓民族としての黑人人民　44. 經濟恐慌とニュー・ディール　45. 黑人と新らしい勞働組合主義　46. ファシズムと第二次世界大戰　47. 黑人と冷い戰爭　48. こんにちの黑人差別制度　49. 前進すべき道　50. 黑人の民族解放

(參考までに，さきの問題別分類と書物の各章との關係を，わたくしなりに整理すると，つぎのようになる。Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ……は問題別分類の，1, 2, 3……は各章の數字を示す。

Ⅰ……1～6.　Ⅱ……7～19.　Ⅲ……20～25.　Ⅳ……26～31.　Ⅴ……32～36.　Ⅵ……38, 39, 40, 44, 46.　Ⅶ……45.　Ⅷ……37, 42.　Ⅸ……43.　Ⅹ……47, 48, 49, 50.)

みられるとおり，これは立派にアメリカ社會發展史の具體的な內容である。もうすこし限定していえば，アメ

7, 8) *Political Affairs*, March, 1954 に掲載された『黑人史』讀者案內を參照。

リカ社會政治史である。それが，他の多くのいわゆるスタンダード・ワークから區別されるところは，一方が上から歴史のながれを眺めているのにたいして，これは下から歴史のながれのなかにはいりこんでいるということである。一方が科學的な客觀主義の名のもとに，じつは治めてきたもの——支配者の歴史をかいているのにたいして，これははっきりと，治められてきたもの——民衆の變革の歴史をかいているということである。じっさい，この書物には，アメリカの社會的發展のなかでの重要なできごとは，たいていふくまれているし，多かれ少なかれ，黒人の問題をぬきにして處理できる，重要なできごとは，アメリカ史上において，殆んどないのである。わたくしは，そういう意味で，アメリカのこんにちまでの歴史は，南北戰爭をさかいに，その前半は黒人奴隷制度を，その後半は黒人差別制度を，それぞれを軸として展開されてきたといっても，いいすぎではないようにおもう。というのは，アメリカ最初の世界的事件である，獨立戰爭，それは，南部のプランターと北部の商人資本家とに指導された，本質的には，民族解放のためのブルジョア民主主義革命であったが，その革命でなしのこされた問題——その最大のものが黒人奴隷制度——が，一世紀ちかくのちのアメリカ第二のブルジョア民主主義革命，南北戰爭にもちこされ，戰爭をとおしての北部の勝利は，北部産業資本家に國内市國を獲得させることによって，その資本主義的發展のための道を十分にひらいたが，同時に再建期における革命の不徹底さは，南部にこれまでの型の奴隷制度にたいして新らしい型の奴隷制度——peonage とか debt-slavery とか呼ばれる借金奴隷制度をつくりあげ，かくして，この半封建的な遺制が，世界で最高度に發達したこの資本主義國のなかに，いまなお存續しているという奇型な現象を，この國にあたえているからである。

さきに，わたくしは，アメリカ黒人人民の歴史が，「民族のなかの民族」への歴史的成長であり，それはかれらの長い苦しいたたかいのなかでこそ，はじめて可能になったのだということを强調したが，じつは，黒人人民のこの民族的形成過程が，それじしん孤立したものではなく，終始，インデァアンをふくむところの働らく人民大衆との强力な共同闘爭，統一闘爭として展開されてきたということを，とくに，ここでつけくわえておかなければならない。このような連帶性は，すでにのべた黒人人民の數々のたたかいのなかで隨所にみうけられる——たとえばインディアンとの關係についてみても，1622年のインディアンによるジェームス・タウンの襲擊や 1816 年の西フロリダのニグロ・フォートのたたかい Battle of Negro Fort のばあいなど——が，それは，たんに國内ばかりではなく，また，海外の民主勢力とも結びついて——たとえば，フランス革命，ハイチの奴隷革命（1790～1803 年），そして南北戰爭時のイギリス勞働者階級との關係，それから黒人アボリショニストとしてのフレデリック・ダグラスの海外旅行やマーカス・ガーヴェイの諸活動，W・E・B・デュ・ボイスの數回にわたる汎アフリカ會議 Pan-African Congress，そしてポール・ロブソンのアフリカ問題協議會 Conncil on Affrican Affairs や全國黒人擁護協會 N. A. A. C. P. の「世界への訴え」"Appeal to the World"（1927 年）や市民權會議 C. R. C. の「われわれは根だやしを告發する」"We Charge Genocide"（1951年）のばあいなど——はっきりと，インターナショナリズムにもとづいていたのである。『黒人史』が，同時にわたくしのいう「アメリカ史」であることのモメントが，また，ここにある。

このことに關連して——ここで書物の内容を章をおって逐一説明することは，とうていゆるされないので一，二の點をのべるにとどめるが——『黒人史』をよんで，すぐに氣がつくことは，ぜんたいのなかで，第二アメリカ革命のしめる比重がきわめて大きいということである。第二アメリカ革命というのは，一般には，1776年の獨立戰爭を第一アメリカ革命（あるいは，たんにアメリカ〔獨立〕革命）とよぶのに對比して，南北戰爭をさしてそうよんでいるのであるが，わたくしがここで南北戰爭といわずに，とくに第二アメリカ革命といういいかたをしたのは，革命の觀點からみたとき，アメリカ第二の民主主義革命は，1861～5 年の内戰の段階だけでは不十分であり，それよりもっと進んだ社會革命の段階であり，同時に反革命の段階でもあるところの，戰後の 10 年間，1867 年の大統領選擧戰にいたる再建期を，これにふくめなければならないと考えるからである[9]。かくして，わたくしがいまのべた意味での第二アメリカ革命について，書物は第 19 章から第 32 章までの143 頁をさいており，これにこの革命の直接の前史である第8章から第 18 章までの119頁をくわえると，じつにぜんたいの半分ちかくがそれにあてられていることになる。これは，この革命がどれほど深く黒人の問題と結びついているかを物語るとともに，この革命のアメリカ史における重要さを最高度に主張した點で，他の書物にはなかなかみられない特色である。

なお，また，書物が『黒人史』とはいいながら，通史

9）民科歴史部會編『世界歴史講座』第4卷所收の拙稿「第二アメリカ革命と黒人」參照，122—3 頁。

のなかでフレデリック・ダグラス Frederick Douglass (1817年～1895年) を，これほど高く評價し，そのための頁數をさいているのも珍らしい。それには，フォーナーなどのすぐれた業績の影響も十分にあったであろうが，これまでのアメリカ史のいわゆるスタンダード・ワーク——たとえば，J・F・ロード James Ford Rhodes の7卷，J・B・マクマスター John B. Mc Master の10卷，E・チャニング Edward Channing の6卷などが，殆んど全くダグラスを無視しているか，あるいは歪曲しているのにくらべて著しい對照をなしている。このことは，アメリカの「思想」や「文明」また「政治理論」をもっぱらとりあつかった書物，パリントン Vernon Louis Parrington の有名な *Main Currents in American Thonght* やビーアド Charles Beard の *Rise of American Civilization*; またメリアム C. Edward Merriam の *A Hitory of American Political Theories* が，その奴隷制についての論議を展開するにあたって，ガリソン William Lloyd Garrison にはふれながら，おなじアボリショニストとして，もっと偉大なはたらきをしたダグラスについてふれていないのを考えあわせるとき，ダグラスをめぐるこの對照がなにを意味しているかは，あらためて强調する必要はないであろう。

最後に，わたくしが，この書物をよみながら，わたくしなりに氣のついたことがら——希望や疑問——を若干のべさせてもらうことにする。

さきに，わたくしは，『黑人史』が，ひとつのアメリカ社會政治史であるといったが，このいいかたのなかには，その社會や政治をささえているそれの基礎としての經濟の分析が，もっと澤山ほしいという氣持がこめられている。すなわち，一言でいえば，ぜんたいをつうじて，經濟史的な說明がもっとなされてもよいのではないかということである。たとえば，さきにもふれたように，1776年の獨立革命が，そのなかですでに奴隷の解放を問題にしながら，けっきよくにおいて奴隷制度を解決できなかったのはなぜか——これは別の面からみれば，獨立宣言から連邦憲法制定にいたる反革命勢力の增大であり，革命的な州憲法から保守的なそれへのかきかえである——その歷史的諸條件の經濟的基礎の分析である。わたくしは，「アメリカ革命は，なぜ，黑人奴隷制度を解決できなかったか」という獨立の一章が，第4章と第5章のあいだにあってよいとおもうくらいである。おなじことは，1820年のミズーリの妥協にはじまりサムター要塞の攻擊にいたる，南部プランター權力の數々の先制攻擊のその底を一貫してつらぬいている，アメリカ最盛期の奴隷制度の基本的經濟法則を，それじたいとして，もっと總括的にのべてほしかった。これらの說明は，再建期において，わたくしがもっもと希望するところである。そこでは，たとえば著者じしん 1873 年の恐慌の重要さを指適しながらも，その具體的意義が十分にのべられていない。また，とりわけ，この時期の最重要問題が土地問題であり，それの革命的解決に失敗したことが，やがては反革命勢力の復活を可能にし，最後に「新らしい南部」の政治權力の再編成過程を確立したと，いくたびも强調しながら，その土地問題の具體的な展開に十分の紙數をあてていない。この點についての，もっとたちいたった分析がなされていたならば，1877年のヘイズの裏切りの意味，そして著者がみごとに指摘している，それにもとずくところの南部における新らしい階級構成の成立，ひいては，再建期におけるブルジョア民主主義の成果と限界の歷史的諸條件が，いっそう明確にされたであろうとおもう。

これは，この書物にたいする，わたくしの個人の希望のいくつかであり，そのような希望は，讀者がもつ關心の特殊性に應じて，さらにいくらでも提出される性質のものである。その意味で，これは，わたくしの慾張りすぎた注文ということができるであろう。ただ，わたくしは，きわめて小さなことだが，つぎの2點について，あるいは著者のおもいちがいかともおもわれるふしがあるので，わたくしの誤解かもしれぬが，以下に簡單に記して，識者の——できれば著者じしんの——教えを請いたいとおもう。

a) 書物の126頁に，フレデリック・ダグラスの *The North Star* の最初の發行が，1837年12月7日となっている。原文は，つぎのとおりである。

The Negro Convention movement, which functioned as part of the general Abolition struggle, worked closely in and with the Anti-Slavery Society. Its workers and leaders, as remarked earlier, were to be found in all the many fronts of the fight. A big event of theirs was the first appearance on December **7, 1837**, of Fredrick Donglass' paper, *The North Star*, later renamed *Fredrick Douglass' paper*. (p. 126, 太字は引用者) ところが，じっさいには，ダグラスとガリソンとの訣別にもなったこの有名な刊行物は，**1947** 年12月**3**日に，ディラニイを協力者として，ダグラスがロチェスターで發行したのである。(Aptheker の *A documentary History of the Negro People in the United States* の265頁や Foner の *The Life and Writings of Frederick Douglass* の第1卷84頁を參照。なおフォスターも書物の 150 頁で……when

Douglass launched *The North Star* in Rochester, New York, on December 3, 1847……とかいている。）そうだとすれば，この年月日の間違いは，前後の關係からみてもたんなるミスプリントとはおもわれない。なお，げんざい私の手許にある限られた資料では，著者が特に强調するほどのできごとは1937年12月7日には，みあたらない。

（ついでながら，この書物には若干のミスプリント——たとえば，strategical が stategical に（p. 268），Fifteenth Amendment が Fifteenth Amendmen に（p. 329），人名の Douglass が Douglas に（p. 124），Wells-Barnett が Well-Barnett に（p. 393），また年代の on June 30, 1865 が 1866 に（p. 294）なっていたりするような——が眼につく。なかでも，開卷第1頁の目次の第5章，The Abolition of Slavery in the North and South——じつは，Nothwest のまちがい——は見苦しい。）

b）南北戰爭の內戰の段階を經て，歷史は，アメリカ史上劃期的な，それ故にもっとも論議のやかましい再建期，マルクスのいわゆる「眞の革命の段階」にはいることになるが，ジョンソン大統領の反革命的なうごきに抗して，議會がとった數々の革命的方策のなかのひとつ，1867年3月2日の「第1次再建法」をのべたあとで，著者は，つづいてつぎのようにかいている。

During the next **nine days, March 2—11**, Congress passed **three more Reconstruction acts**, making more precise the general line laid down in the first law.（p. 308，太字は引用者）ここの three more Reconstruction acts は，具體的には，第2次，第3次，第4次の「再建法」とよまれるのが自然であり，それらは，いずれも the first law（上記の「第1次再建法」と解して）の general line をいっそう precise にするためにつくられたものである。ところが，事實問題として，第2次，第3次，第4次の「再建法」は，それぞれ，1867年3月23日，1867年7月19日，1868年3月11日に議會を通過している。第1次の翌日から數えて1年と9日目に第4次の再建法がつくられたわけである。（たとえば，Commager の *Documents of American History* の Document No. 265, No. 267, No. 270 や Morris の *Encyclopedia of American History* の 248 頁など參照）そうだとすれば，During the next nine days, March 2—11 というのは，なんのことかよくわからない。

以上が，私が氣づいた小さな疑問點であるが，そこに著者のなんらかのおもいちがいがあったとしても，それが，本書の基本的な價値をそこなうものではなく，いわんや，さきに述べたわたくしのこの書物にたいする評價と尊重の氣持に，いささかの改變もくわえるつもりはない。

はじめの豫定では，このあと，『黑人史』と『黨史』と『政治史』の相互連關——わたくしのみるところでは，これら3つの書物は，それぞれ個別的なテーマをもってかかれた，それじしん獨立の書物であるにもかかわらず，ぜんたいとして3部作をなしている——についてのべ，さらに，これらの書物を，われわれ日本人が學ぶ態度について，このたびアメリカ共產黨がだした新らしいプログラム，『仕事と平和と民主主義への——アメリカの道』The American Way to Jobs, Peace and Democracy をも加味しながら，考えてみたいとおもっていたのであるが，すでに，ゆるされた紙數をこえてしまったので，ここでそれができないことをおわびする。（1955・3・31）

〔付記〕

さいきん入手した『ポリティカル・アフェアーズ』誌の5月號は，黑人問題についての2つの論文で，その三分の二の頁數が占められている。W. Z. Foster の *Notes on the Struggle for Negro Rights* と Andrew Stevens の *The Fight Against White Chauvinism* がこれである。とくに，フォスターの論文は，ここでとりあげた書物と關係があるばかりでなく，げんざいの，ことに戰後の黑人問題を考察するにあたって，いくつかのきわめて重要な問題を新しく提起しているので，ここであわせて論評できなかったのは殘念である。またの機會を，まちたいとおもう。（1955・6・22）